

*** 今日の健康(2月)***

＜ 今期のインフルエンザ流行、そして心配されるH3N2 ＞

今期インフルエンザが大流行しています。厚生労働省が1月26日発表した全国約5千カ所の定点医療機関から報告された最新の1週間(1月15~21日)の患者数は、1医療機関あたり51.93人。前週から2倍近くに急増し、警報レベルの30人を大きく上回りました。現在の調査方法となった1999年以降で最多です。

厚労省によると、全国の推計の患者数は約283万人で、前週から112万人増えました。年齢別では5~9歳が約59万人と最も多く、10代も約40万人に上りました。

休校や学年・学級閉鎖をした保育所や幼稚園、小中高校は全国で7536施設に上り、前週の161施設から50倍近くに急増しました。

ウイルスは直近の5週間では、2009~10年に新型として流行したA型のH1N1とB型が同程度で全体の8割超を占めています。複数の型のウイルスが同時に流行し子どもを中心に患者数を押し上げているとみられています。



厚労省によると今期は米国やオーストラリア、フランスで過去5~9年で患者数が最多となるなど、世界的にインフルが流行しています。例年はA型が12月から2月にかけてB型に先駆けて流行しますが、今年はずでにB型(毎年2~3月)の流行が拡大しておりこれだけ早く出るのはあまりないことです。B型の立ち上がり早くA型と混合して流行し、軽症でもインフルにかかっている可能性があることが知られてきて、そうした患者がきちんと診断されて患者数を押し上げている可能性もあると分析されます。今期はワクチンの製造が遅れ、それが大流行につながったとの指摘もありますが、ワクチン不足が騒がれたことで、逆に打たないといけないという動きにつながったとも推察されています。(1月27日新聞各社より)

昨年9月、日本とは季節が真逆の南半球、特にオーストラリアで昨年9月にインフルエンザが大流行し、豪政府の統計によれば、9月29日の段階で19万5312人の罹患、417人の死亡者が確認されています。前年同時期のオーストラリアでのインフルエンザによる死亡者は65人。今年はその6倍を超える死者が出ている異常事態となりました。死者の多くは香港A型の一種である「H3N2 亜型」に罹患していました。

昨年米国で大流行したH1N1型は2009年に発生した新型インフルエンザの系統でしたが、今回のH3N2 亜型はそれよりも人に対する病原性が強く、特に免疫力や抵抗力の弱い80才以上の高齢者や乳幼児、5~9才、妊婦などを重症化させやすいことが指摘されています。

南半球で流行したインフルエンザはその半年後に北半球で流行する傾向が見られます。(週刊ポスト2017年11月3日号)

そして2018年1月31日NewSphereの報道によると、今年アメリカで大流行するウイルスは例年とは違い感染力が強く症状も重く、インフルエンザワクチンの効力が薄い「H3N2型」です。オーストラリアで昨年流行したものと同一タイプで、アメリカではもはや「疫病(エピデミック)級」の猛威をふるっているといえます。アメリカより人口密度が高い日本で感染が拡大しやすいので注意を要します。

前澤クリニック 内科・小児科 0422-30-2861

天文台通り多摩信用金庫のななめ裏